

氷のように冷たい空気が、五月頃になると、急に北の方へおし流されて、もう十分あたたくなくなっている地面の中の熱と、日の光とが、にわかには働きだして、一日一刻も惜しいような山の春があらわれ、又たちまちそれが夏にかわつてゆくのである。東北の春のあわただしきは、リンゴ、梅、梨、桜のような、いわゆる春の花の代表が、前後する暇もなく、一時にぱつと開いて、まるで童話劇の舞台にでもいるような気を起させる。

(昭和二十六年『山の春』より)



鉛筆淡彩『ミツ』昭和二十年作

東京から花巻へ疎開した高村光太郎は、滞在した先々で目にした初夏の光景に感動し、花や山菜などをスケッチして残しました。

その後移住した山口集落では暮らしの中で接した植物などがスケッチに残されており、自然を題材にした詩集の構想もうまれました。

詩集は未刊に終わったものの、山の暮らしの中で詠んだ詩やスケッチは当時の文芸誌や雑誌に掲載され、世に知られることとなりました。

この展示では、光太郎が太田村（現花巻市）で過ごした自然をテーマとして、草花のスケッチや詩稿などの資料を紹介します。

## 高村光太郎記念館

〒025-0037 岩手県花巻市太田 3-85-1 ☎0198-28-3012  
開館 午前8時30分 閉館 午後4時30分 休館日 12月28日～1月3日

### 高村光太郎記念館 入場料

一般 350円 / 高校生・学生 250円 / 小・中学生 150円  
※団体入場(20名以上)は上記から一人あたり50円割引

